

交友俳壇

交友会俳句四月例会

日時 平成二十一年四月八日（水）

兼題 花見・花祭 当季雑詠

赤羽 暁雨

這ひ這ひの嬰やが主役の花見の座

まなじり
眈まの紅の幼なく花まつり

綿菓子を手にして迷子花の昼

芦川 草魚

人も花も一期一会の花見かな

常念岳空をはるかに鳥帰る

家具少し位置かへてみる四月かな

今井逃水居

小さき手に手を添え甘茶漉ぎけり

島の灯の朧や遠く鳴る汽笛

吟行の足をとどめし花大根

隅田 茅舟

花も見し上野の山の阿修羅展

図書館のつゐのまどろみ四月馬鹿

駅はみな禁煙なりし三鬼の忌

岡本 紫生

街つなぐ揃いの衣花見かな

花祭浄土の友と酒を酌む

散り桜一片髪に土産かな

田中 花塵

ほどほどに生き長らへて花見かな

口笛が自転車で来る花吹雪

遠き日を思ひ出させる夜の臆

北畠十季子

花散るや運河に浮かぶレストラン

花筏組みつほぐれつ目黒川

飛行機雲天に伸びゆく花祭

津久井うさぎ

受け継がるサラリーマンの花の宴

つくしんぼ昔の友に出会ひけり

太幹に心ゆくまで咲くさくら

久保田白洋

白塗りの稚児の燥やぐや花祭

ひっそりと老樹は幹に花付けて

場所取りの新入社員一人ぼち

野中 白水

咲き初めに散る花もあり山桜

握りめし腰に隅田の花見かな

風の朝決めたる如く散るさくら

樋口 牧人

半月に千鳥ヶ淵の花見かな
門前にどよめきおこる花祭
胸をはり汗にじませて入学す

横山 翠雲

駄駄担ねる稚児宥めつつ花祭り
江戸っ子は見栄張りたがる花見茶屋
人に酔ひ花に酔ひ痴れ酒に酔ふ

古澤みちを

人も鳥も花にうらうら虚子忌かな
老どちの昭和の唱歌花筵
早起きは老いの生甲斐種を蒔く

吉田 博明

墨堤の尽きんとするや花御堂
花の山「ああ上野駅」聞こえくる
花祭嬰の右手は何処を指す

本田はじめ

花まつり天上天下晴れ渡る
乾杯の女声して花見船
買物の百歩ばかりは花見の歩

山岸 峯月

一木の花に満たさる花見かな
落ちてなほグラスに光る紅椿

顔揃へ畏かしこまりたる黄水仙

交友会俳句五月例会

日時 平成二十一年五月十三日(水)

兼題 苺・夏めく 当季雑詠

赤羽 暁雨

夏めくやミントの香るハーブ店
手秤りに売る朝市の熟れ苺
この町の銀座短かし花水木

芦川 草魚

若竹や真底ぐ育て男の子
筑波山影を置きたる植田かな
野苺はいまが食べ頃野良帰り

今井逃水居

木漏れ日の夏めくカフェテラスかな
下駄の音すたれて久し傘雨の忌
四肢折りて戒壇そばに袋角

岡本 紫生

夏めくや老眼鏡の中の文字
若葉風緩む体の蝶番
鯉幟影は隣の屋根泳ぐ

北島十華子

化粧水手にたっぷりと夏めけり
朝摘みの苺ならびし道の駅
母の日や若者に席譲らるる

久保田白洋

敗戦は遠き彼方に苺食^はぶ
夏めくや五百羅漢は笑み給ふ
天辺の黄みどり映えぬ楓大樹

隅田 茅舟

夏めくや白きメッシュの靴磨く
逆上り出来て自慢ぞ裸足の子
藁殻火の赤赤母の仕舞ひ風呂^{なからび}

田中 花塵

段畑の石垣飾る熟れ苺
うたた寝の幸せ思ふ若葉風
五月空切つて戻り来ブルーメラン

津久井うさぎ

夏めくや夜風を入れる窓明り
子らの目へ苺ケーキを五等分
おもむろに後足^{あとあし}畳む墓

古澤みちを

乳牛の乳房ふくらみ夏きざす
憲法記念日思ひあらたに戦中派
甥運転田植機同乗筑波晴

本田はじめ

夏めくや人妻^は美しき傘の中
亡き人の仕種や舌に置く苺
車いす母に押されて聖五月

野中 白水

夏めきてなにか蠢く裏の藪
廃屋の垣貫けり眞竹の子
花園を踏みて黄ばらに咎められ

樋口 牧人

いちご狩富士仰ぎつつまたひとつ
朝食のしあげに五つぶ熟れ苺
見送りの通学の道夏めきぬ

山岸 峯月

へり空に洗車のしぶき夏めけり
大仏もぬるる鎌倉余花の雨
芍薬や和服輝く琴の会

横山 翠雲

新潟産「越後姫」競り市に新種いちごの最
高値
ベランダに満艦飾の五月晴
江戸っ子の血潮を沸かす三社祭

吉田 博明

サウンドオブミュージック聴く涼夜か
看護師の弾くピアノ曲涼やかに
若葉光リングの唄を聴くホーム

~~~~~

## 麦の秋

相田 和泉

牧童の一事と三言厩出し  
貝寄風は平家琵琶弾く替女頭  
酌み交はす飛鳥の山や飛花落花  
六本木ヒルズ八百八町大霞  
菊根分手馴れし妻の助手となり  
むつごろう捕らはれてなはおどけ顔  
番犬に追い返さるる麦の秋